

ガイラ・ボット系オノマトペの個人差について

川 越 め ぐ み

1 ガイラ・ボット系オノマトペの概要

オノマトペは、自然の音や人・動物の声や様子、身体感覚や感情などを言語音の組み合わせによって模写する語彙の総称で、音を写し取った擬音語と、音のない様子や状態を表す擬態語に大きく二分される。擬音語は、人や動物の発声器官によってつくられた音を写し取る擬声語、それ以外の音を写し取った擬音語に分けられる。擬態語は、人や動物の外見を形容する擬容語、感情や感覚を表す擬情語、その他の様子や状態を表す擬態語に分類される。

そのオノマトペの大きな特徴として、副詞として機能し、具体的に動作を描写するという点が挙げられる。例えば、「ぐいと引張る」とオノマトペを用いた場合、「強く引張る」という一般語彙^{注1}を用いた場合と比べて分かるように、力の入れ具合や勢い、その他さまざまなイメージが喚起される。このイメージは音象徴から来るものであったり、その語が使用され続けることで形成される文化的・社会的イメージであったりするものであるが、いずれにしても、そのイメージの具体性という点がオノマトペの特徴である。

しかし、東北方言には下の(1)(2)のように「急に」「いきなり」「すぐに」などと同じような意味用法を持つオノマトペが存在する。これらは具体的なイメージを弱めてしまっている。

(1) あの人 ガラリ 亡くなつたんだ。(=あの人、急に亡くなつたんだって)

(2) 天気 グラリ 変わった。(=天気が急に変わった)

小野正弘編(2007)『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』には、「びらり」という項目があり、「すばやいさま」という意味で「びらり取る(さっと取る)」(岩手県)、「いいど聞いたんで、びらり買いますた」(宮城県)という用例が載せられている。「ビラリ」は共通語の「びらびら」(紙や服の裾など薄い物がひるがえる様子)というオノマトペと同じ「びら」という語基を持つが、「びらびら」の描写する「薄い物が翻る」といったイメージから考えると、「びらり買う」という言い方はかなり異質なものに感じられるだろう。

このような用法を持つオノマトペは、「ガラリ」「グラリ」「ビラリ」に限らない。宮城県気仙沼市では、菅原孝雄(2006)『気仙沼方言アラカルト(増補改訂版)』に、「ボット」「ボッポリ」「グエラ」などの複数のオノマトペが「急に」や「いきなり」「突然」という意味、「ビラット」「ビラリ」は「すぐに」などとほぼ同じ意味であると解説されている。また2005年調査の際、菅原氏本人に面接調査をする機会を得、これらのオノマトペをほとんど同じ意味で用いているという内省を得た。

このような語は、(3)のように、語基音ごとの系統に分けると7系統になる。現在のところ山形県・宮城県において31語^{注2}を収集しており、すべて動作の取りかかきの早さ、あるいは急激に物事が

起こる様子を表している。これらを本報告では、気仙沼市で特に多く用いられているらしい「グイラ」と「ボット」にこの語群を代表させ、グイラ・ボット系オノマトペと総称することとする。この31語のうち、気仙沼市で使用が確認されたのは、(3)のうち波線で示した9語である。

(3) ①グイラ系：グイラ（グエラ）、グイラリ、グイット（グエット）、グット

グラリ、グイラギッタリ、グラット

②ボット系：ボット、ボッポリ、ボッポラ、ボッポラボット、ボイット（ボエット）

ボイラ（ボエラ）、ボッコリ、ボッコラ、ボコット、ボックラ、ボックラボット

③ガラリー系：ガラリー、ガラット、ガイラ（ガエラ）、ゲアラ、ゲアリ

④ビラリー系：ビラット、ビラリ

⑤ズイラ系：ズイラ（ズエラ）、ズラリ

⑥ゴイラ系：ゴイラ（ゴエラ）、ゴエット

⑦ドイラ系：ドイラ（ドエラ）、ドエット

本報告では、このグイラ・ボット系オノマトペについて調査を行った2006年度の多人数調査の結果から、個人差あるいは地域差についての分析を行っていきたいと思う。

2 具体的描写性について

通常、オノマトペが副詞的に用いられる場合は、様態副詞あるいは結果副詞として用いられる。仁田(2002)では、「〈取り掛かりの早さ〉を中心に動きの早さに関わる」様態副詞として、共通語のオノマトペである「さっと顔色を変える」「パッと瞬間に変わってしまう」の「さっと」「パッと」などを分類している。これらのオノマトペを用いた副詞はあくまで様態副詞であり、「時間関係の副詞」のうち、取り掛かりの早さを表す「急に」「いきなり」などの一般語の副詞とは区別されている。様態副詞は「動きそのものの展開の時間的早さ」を表すものであり、時間関係の副詞は「事態の実現・成立のあり方を限定し特徴づける副詞的成分」である。時間的早さを表す時間関係の副詞は「動きが占める時間幅」を表す。

様態副詞と時間関係の副詞、この2種類の副詞を区別する根拠として、仁田(2002)では「パッと瞬間に変わってしまう」のように時間関係の副詞と様態副詞が共起する例を挙げている。この基準から見ると、グイラ・ボット系オノマトペは「急に グイラ 来た」のように「急に」と共起し、様態副詞的性格を持つはずだが、(4)のように「急に」「突然に」といった時間関係の副詞とは共起できず、時間関係の副詞に近づくことがある。

(4) * あの人 急に ガラリ 亡くなつたんだ。

? 天気 突然 ガラリ 変わった。

宮城県北部に位置する栗原郡のオノマトペをまとめた佐藤(2003)では、グイラ・ボット系オノマトペに属する「ズイラ」が「時間的表現」に分類されている一方、同じグループの語は(5)のように様態副詞的なものとなっている。

(5) 時間的表現 : スカスカトやってくる。 棚にチャカット置いた。

ズイラ戻ってきた。 家にトロツトやってくる。(佐藤 2003 p.130)

仁田 (2002) の分類に従うと、佐藤 (2003) のような語は早さを表す様態副詞の中でも「〈質・様〉への言及を含みながらの〈早さ〉」を表す様態副詞に当てはまるとされる。この様態副詞の特徴として、「より純粋に早さを表す」様態副詞に比べて使用範囲が狭いことが仁田(2002)で指摘されている。より純粋に早さを表す様態副詞「ユックリト」などは使用範囲が広いが、「スタスタト」などは動きの〈質・様〉への言及を含んでいる分、使用範囲が狭いのである。そして、時間関係の副詞は純粋に早さを表す様態副詞よりもさらに〈質・様〉への言及という性格は弱くなっていると考えられる。

多くのオノマトペは、小林 (2010) でも述べられているように「現場性」が強く、「状況をリアルに映し出す」ものであり、描写対象と非常に密接に結びついている点において、〈質・様〉への言及という点はオノマトペの特徴と重なる部分であると思われる。「スタスタ」というオノマトペであれば移動に関わる動詞と結びつき、「オイオイ」というオノマトペであれば泣く様と結びついている。すなわち、〈質・様〉への言及を含む様態副詞がオノマトペの基本的な性格なのである。

この「〈質・様〉への言及」があることを本報告では「具体的描写性がある」と言う。具体的描写性が高いほどオノマトペらしく、使用範囲が狭く、共起する動詞の多様さに欠けるということになる。すなわち、グイラ・ボット系オノマトペにおいては、具体的描写性が弱くなればなるほど、オノマトペらしさが弱くなり、使用範囲が広がって、より純粋に早さを表す動き様態の副詞に近づく。さらに、具体的描写性がより弱くなれば、動きそのものの展開に関わらなくなる分、「急に」などの時間関係の副詞と共起しなくなる。まとめると、グイラ・ボット系と具体的描写性との関係は次の表1のように表せるだろう。

〈表1〉

	グイラ・ボット系オノマトペにおける具体的描写性の強弱		
強弱	強い	弱い	ない
副詞の種類	「〈質・様〉への言及を含む様態副詞	「より純粋に早さを表す」様態副詞	時間関係の副詞
動詞との共起	共起する動詞の種類が少ない	共起する動詞の種類がある程度多い	共起する動詞が多い
オノマトペらしさ	オノマトペらしい	オノマトペらしさが薄れている	オノマトペらしさがあまりない

以上から、グイラ・ボット系オノマトペは具体的描写性を持つ様態副詞から具体的描写性の弱い様態副詞、そして時間関係の副詞という3つの範囲にまたがる語彙であると考えられる。このことから、本報告ではグイラ・ボット系オノマトペの具体的描写性がどのように用法や地域差、個人差などに関わってくるかという点について考察を加えていきたいと思う。

3 調査の概要と結果

分析の対象とするのは 2006 年度に行われた東北大学国語学研究室による気仙沼市方言調査（多人数調査）によるものである。話者は高年層 21 名、中年層 16 名、若年層 14 名、少年層 20 名の気仙沼市在住の合計 71 名に、他の項目に関する面接調査の際にアンケート調査票を渡し、それを郵送してもらうという形で行った。本報告で考察に用いるのは回答を得た 65 名分である。

内容としては、「急に」を使う(6)の 6 つの場面についてグイラ・ボット系オノマトペと置き換えができるかを聞いた。(6)は菅原(1992)に記載の用例を参照して調査文を設定した。場面 1 が最も典型的な用法で他人の抽象的な動作が急であることについて言及する場面である。場面 2 は自分の動作、場面 3 は状態、場面 4 は目の前の具体的な動作、場面 5 は目に見えないものがなくなった様子、場面 6 は「ピラット」について音象徴的な効果が表れるかどうかを見る動詞としている。各場面でグイラ・ボット系オノマトペの選択肢を出し、複数回答可とした。

(6) アンケート調査文

- ◆ 気仙沼には「急なこと」をあらわすことばがたくさんあるようです。ここでは、そういったことばについておうかがいします。各質問文の「急に」の部分と言いかえのできることを、それぞれ選択肢の中からすべて選んでください。

場面 1：予定があるのに、前日になって急に仕事を頼まれた。

「（急に） そんなこと言われても困るよ」

場面 2：急に思い立って、ともだちの家に遊びにきたので、お土産をもってこなかった。

「（急に） 来たものだから、手ぶらで来ちゃったよ」

場面 3：道を教えるとき、曲がり道があることを伝える。

「そこで （急に） 道が曲がっているから、そこを道なりに行くんだ」

場面 4：前を歩いていた人が、急に道を曲がっていったことを伝える。

「それで、その人 （急に） 道を右に曲がっていったんだよ」

場面 5：用事があったのだが、突然その用事がなくなってしまった。

「今日の日曜、（急に） 予定がなくなって、暇になったよ」

場面 6：自転車もしくは自動車に乗っているとき、強風で目の前に新聞紙が飛んできた。

「新聞紙が （急に） 飛んできて、びっくりしたよ」

〔選択肢〕

- ア. ぼっと イ. ぼっぽり ウ. ぼっぽら エ. びらっと オ. びらり
カ. ぐいら キ. ぐえら ク. げあら ケ. げあり コ. げらり
サ. ずらり シ. どれも使わない

表 2 が調査の結果であり、数字は使用すると答えたインフォーマントの数である。また、表 3-1 ~3-3 は各インフォーマントの回答の例で、特に特徴的な回答が見られた高年層男性の話者 3 名のものを挙げた。最左枠は年層・性別、年齢、居住地の順の記載となっている。

〈 表 2 〉

場面	ボット	ボツポリ	ボツポラ	ビラット	ビラリ	グイラ	グエラ	ゲアラ	ゲアリ	使用無
1	27	17	31	2	3	7	1	1	5	23
2	10	17	21	0	0	2	0	0	2	25
3	4	2	4	0	0	15	4	1	5	38
4	4	4	8	3	4	12	0	3	8	34
5	7	2	17	0	1	2	0	0	1	41
6	13	3	11	6	4	1	0	0	2	34

(表 3-1)

Info.No.18	問No.	ぼっと	ぼっぼり	ぼっぼら	びらっと	びらり	ぐいら	ぐえら	げあら	げあり	げらり	ずらり	使用無
高男 65 松崎前浜	1	○	○	○			○						
	2		○	○									
	3							○					
	4									○			
	5		○										
	6	○	○	○									

(表 3-2)

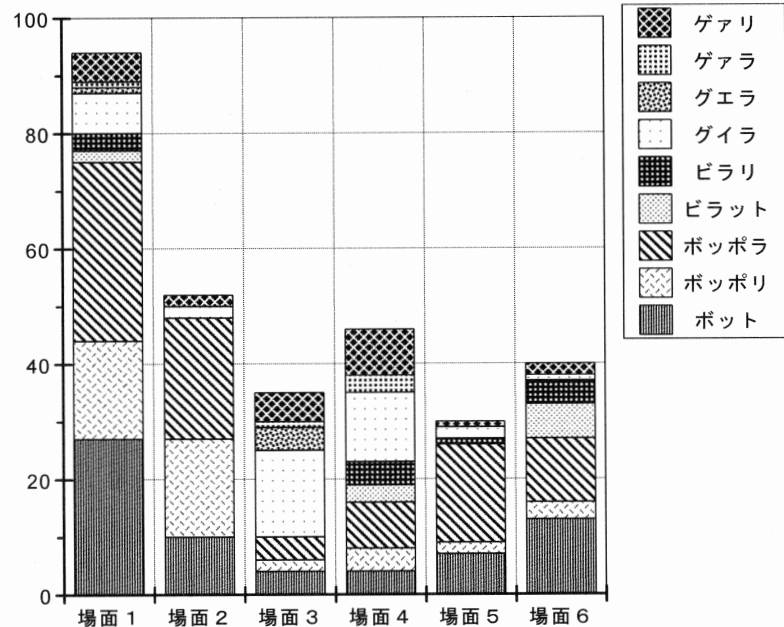
Info.No.5	問No.	ぼっと	ぼっぼり	ぼっぼら	びらっと	びらり	ぐいら	ぐえら	げあら	げあり	げらり	ずらり	使用無
高男 75 松崎萱	1			○			○			○			
	2			○			○			○			
	3			○			○			○			
	4			○		○	○			○			
	5			○			○			○			
	6			○			○			○			

(表 3-3)

Info.No.7	問No.	ぼっと	ぼっぼり	ぼっぼら	びらっと	びらり	ぐいら	ぐえら	げあら	げあり	げらり	ずらり	使用無
高男 76 常楽	1	○											
	2	○											
	3							○					
	4									○			
	5												○
	6												○

まず表2を見ると、場面ごとに語の使用の偏りがあるのがわかる。場面1と場面2ではボット系が多く使用され、場面3と4ではグイラが、場面5はボツポラ、場面6ではボットが目立ち、ビラリ系の中では場面6での使用が若干多めとなっている。場面6でビラリ系が多いのは音象徴的に「言えなくもない」と判断されたことによるものと思われる。場面と語形の数をグラフにまとめると、図1のようになる。

〈 図 1 〉



また、表 3-1、3-2、3-3 の各インフォーマントごとの使用を見ると、個人差として、場面ごとに様々な語を使い分けるタイプ（表 3-1）、少数の語をほとんどの場面について汎用的に用いるタイプ（表 3-2）、少数の場面にしかグイラ・ボット系オノマトペを用いず、さらに 1 種類の語しか用いないタイプ（表 3-3）に分けられる。

これら個人差のタイプについて具体的描写性のとの関わりから見ると、場面ごとに様々な語を使い分けるタイプ（表 3-1）は、具体的描写性をより強く感じて残している話者と思われる。少数の語を多くの場面について用いるタイプ（表 3-2）は、具体的描写性をかなり弱めた意味として用いており、その語を汎用的に用いることができるタイプである。前に挙げた表 3-1、3-2、3-3 以外の話者の回答例を表 A～C に挙げる。表 A-1 と A-2 が A タイプ、表 B-1、B-2 が B タイプ、表 C-1 と C-2 が C タイプというようになっている。

（表 A-1：中年層）

Info.No.	問No.	ぼっと	ぼっぼり	ぼっぼら	びらっと	びらり	ぐいら	ぐえら	げあら	げあり	げらり	ずらり	使用無
30	1			○									
	2		○										
中男 53 幸町	3						○						
	4		○	○			○						
	5			○									
	6						○						

（表 A-2：若年層）

Info.No.	問No.	ぼっと	ぼっぼり	ぼっぼら	びらっと	びらり	ぐいら	ぐえら	げあら	げあり	げらり	ずらり	使用無
51 若男 26 田中	1	○	○	○									
	2			○									
	3												○
	4					○							
	5	○											
	6					○							

（表 B-1：高年層）

Info.No.	問No.	ぼっと	ぼっぼり	ぼっぼら	びらっと	びらり	ぐいら	ぐえら	げあら	げあり	げらり	ずらり	使用無
11 高女 75 松崎中瀬	1	○											
	2	○											
	3	○											
	4	○											
	5	○											
	6	○											

（表 B-2：少年層）

Info.No.	問No.	ぼっと	ぼっぼり	ぼっぼら	びらっと	びらり	ぐいら	ぐえら	げあら	げあり	げらり	ずらり	使用無
57 少女 17 所沢 (新城)	1	○		○									
	2			○									
	3	○		○									
	4	○											
	5	○		○									
	6	○											

（表 C-1：若年層）

Info.No.	問No.	ぼっと	ぼっぼり	ぼっぼら	びらっと	びらり	ぐいら	ぐえら	げあら	げあり	げらり	ずらり	使用無
43 若男 36 魚市場前	1			○									
	2			○									
	3												○
	4												○
	5												○
	6					○							

(表 C-2 : 少年層)

Info.No.	問No.	ぼっと	ぼっぽり	ぼっぽら	びらっと	びらり	ぐいら	ぐえら	げあら	げあり	げらり	ずらり	使用無
59	1		○						○				
	2			○									
少女 17	3												○
	4												○
三日町	5												○
	6	○											

なお、2006年調査においては、当時75歳前後の話者にこの汎用タイプがまとまっている。少数の話ししか使用しない話者は、文と場面とがかなり緊密に結びついており、それ以外の場面への応用がきかず、そのため、「急に」などの時間関係の副詞との共起もできないことが予想される。

次に、各世代の語形に使用頻度を表4にまとめる。

〈表4〉

高年層

場面	ボット	ボッポリ	ボッポラ	ビラット	ビラリ	グイラ	グエラ	ゲアラ	ゲアリ	使用無
1	10	9	11	2	2	6	1		6	4
2	5	9	8			2			2	4
3	1		1			8	2	1	4	8
4	1	1	2	2	3	7		3	6	5
5	2	1	8		1	3			1	10
6	4	3	4	3	2	2			1	9

中年層

場面	ボット	ボッポリ	ボッポラ	ビラット	ビラリ	グイラ	グエラ	ゲアラ	ゲアリ	使用無
1	8	5	11							3
2	3	7	6							5
3				1		6	1		1	6
4		2	4	1		4			1	7
5	1		6							8
6	3		5			1	1			7

若年層

場面	ボット	ボッポリ	ボッポラ	ビラット	ビラリ	グイラ	グエラ	ゲアラ	ゲアリ	使用無
1	6	2	6		1					6
2	2	1	5							8
3	1	1	2			1				10
4	3	1	1	1						8
5	3	1	2							9
6	2		1	2	1					8

少年層

場面	ボット	ボッポリ	ボッポラ	ビラット	ビラリ	グイラ	グエラ	ゲアラ	ゲアリ	使用無
1	2	1	2							10
2	2		4							8
3	1	1	1			1				11
4	1		1			1				11
5	1		2							11
6	3		1	1						9

表4において、語の使われ方の傾向を見てみると、高年層についてはすべての語形がまんべんなく出てくる。タイプBの話者によって汎用的に用いられる語も、ボット系以外に「ゲアリ」などが見られるが、中年層以下になると汎用的に用いるタイプで使用される語はボット系に偏ってくる。ビラットから右側、ビラリ系、グイラ系、ガラリー系がなくなってくるのが見て取れる。

世代差に関して、年齢層とタイプの関係についてグラフにまとめたものが図2である。

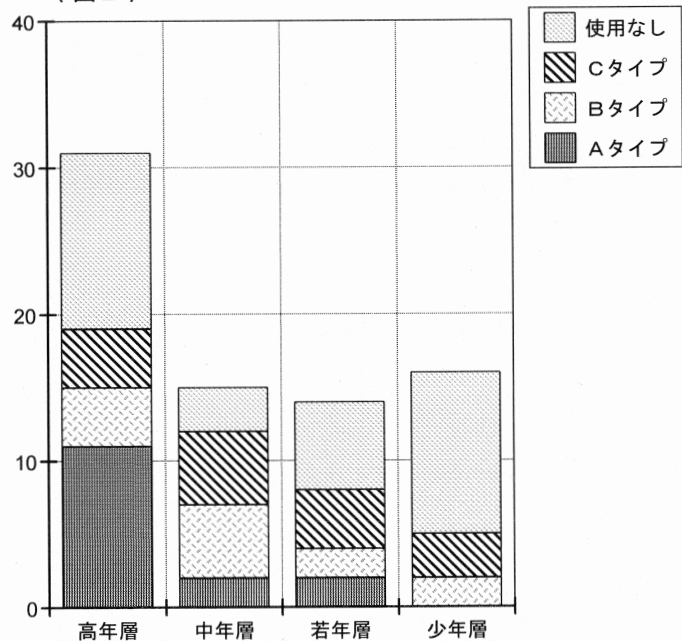
語の用いられ方の傾向としては、高年層についてはすべての語がまんべんなく出てきて汎用的に用いるタイプの話者も多い。汎用的に用いられる語もボット系以外にも「ゲアリ」などが見られるが、中年層以下になると汎用的に用いるタイプで使用される語はボット系に偏ってくる。若年層・少年層になると様々な語を使い分けるタイプがほとんどなくなり、少数の場面、少数の語というタイプが多くなっていく。

この世代差から、高年層において具体的描写性が強いものとして使われていたグイラ・ボット系オノマトペは、次第に

具体的描写性を弱めて、特定の語が時間関係の副詞に近い性格のものとして用いられるようになったと推測される。若年層・少年層の段階ではグイラ・ボット系オノマトペ自体の使用が少なくなってきた、典型的な場面と文以外では用いられなくなり、オノマトペの音象徴的性格から類推できない文脈ではまったく使われなくなっていったことが見て取れる。

以上のグイラ・ボット系オノマトペの世代差に関して、簡単に図で示すと図3のようになる。なお、3.1の山形県寒河江市での中年層の話者は、気仙沼市においては中年層・若年層あたりの状況のあたりの話者に属していると思われる。

〈 図 2 〉



〈 図 3 〉

高年層：タイプA（様々な語を使い分けるタイプ）が最も多い。



中年層：タイプB（汎用的に用いるタイプ）やタイプC（使用が少ない）が増加してくる。



若年層：使用する話者の中ではタイプC（使用が少ない）が最も多い。



少年層：全く使用しない話者が半数を超える。

4 個人差の地域差

このような個人差について、気仙沼市の中でも地域を限定して細かく見ていきたいと思う。そこで、ある程度のインフォーマント数のある松岩地区と気仙沼地区を取り上げ、比較しつつ見ていくことにする。

4.1 松岩地区の傾向

まず、松岩地区は明治8年、旧松崎村と旧赤岩村が合併して松岩村となり、その後、町部の気仙沼村と合併した地域であり、この旧松岩村を松岩地区とする。気仙沼市中心部から見て南及び西方面に位置する。本報告では住宅の多い旧松崎村と旧赤岩村のうちでも東部のインフォーマントを対象とし、山間部の赤岩水梨子・上羽田・四十二の話者は除いて考察を行う。

インフォーマント数は26名（高年層10名、中年層11名、若年層5名）で、うち「使用なし」6名（中年層、若年層各3名ずつ）である。結果を表5にまとめる。

〈表5〉

場面	ボット	ボッポリ	ボッポラ	ビラット	ビラリ	グイラ	グエラ	グアラ	ゲアリ	無
1	12	8	15	2	1	4	1	0	3	6
2	4	9	9	0	0	1	0	0	1	9
3	1	0	2	0	0	7	3	0	4	12
4	2	2	3	1	3	4	0	1	4	13
5	4	1	8	0	1	1	0	0	1	13
6	4	3	8	1	1	1	0	0	1	13

表5では「ボッポラ」が安定して使用されており、表2で見た全体の傾向と同様の傾向を見せている。「ボッポラ」が「急に」という時間関係の副詞近づいているためと思われる。また「ビラット」「ビラリ」が場面6で少なく、様態副詞としての解釈をする話者はほとんど見られない。「ビラット」「ビラリ」もまた時間関係の副詞的な使われ方がメインのようである。「曲がる」の場面3・4を「グイラ」に譲っている点は、全体的な傾向と同じである。

しかし、ひとつひとつの回答を見ていくと、No.5、11、34、39のインフォーマントは、ひとつもしくはいくつかの語を、場面を問わず用いている。つまり3節で挙げたタイプBの話者である。このような回答は、都市部である気仙沼地区にはなく、旧新城村の所沢地区の少年層、赤岩地区山間部の高年層など、非都市部に多く見られるようである。そこで、松岩地区のこの4人のインフォーマントを除いた結果を表6に示す。

すると、場面3・4での「ボット」系の回答が減り、全体的な傾向のところで示した語ごとの傾向がより鮮明に現れる。すなわち、場面1ではさまざまな語形が用いられる。場面1では「ボット」系が中心となり、場面2・5・6で「ボッポラ」が安定している。場面3・4では「グイラ」が多いということである。

〈 表 6 〉

場面	ポット	ポッポリ	ポッポラ	ビラット	ビラリ	グイラ	クエラ	クアラ	クアリ	無
1	10	7	12	2	1	3	1	0	2	6
2	3	8	6	0	0	0	0	0	0	9
3	0	0	0	0	0	5	3	0	1	12
4	0	2	1	1	2	3	0	1	3	13
5	2	1	6	0	1	0	0	0	0	13
6	3	2	5	1	1	1	0	0	0	13

つまり松岩地区では、オノマトペの具体的描写性を活用しながら場面ごとに語を使い分けるタイプ A の話者が多く見られるということになる。そして、場面にかかわらず1つあるいは複数の語を「急に」という意味で区別なく用いるタイプ B の話者も中心部から離れた地域で見られる。

4.2 気仙沼地区の傾向

次に、松岩地区と隣接する市街地、気仙沼地区を見てみる。気仙沼地区はかつての宿場町でもあり、現在の気仙沼市の中心部である。気仙沼駅、南気仙沼駅周辺の地域で、松岩地区とは神山川をなしている。

インフォーマント数は18名（高年層2名、中年層2名、若年層3名、少年層10名）である。うち7名が6つの場面すべてで「どれも使用しない」という回答をしているが、すべて少年層だった。表7に気仙沼地区の結果を示す。

〈 表 7 〉

場面	ポット	ポッポリ	ポッポラ	ビラット	ビラリ	グイラ	クエラ	クアラ	クアリ	無
1	7	3	7	0	0	1	0	0	0	8
2	4	2	6	0	0	0	0	0	0	7
3	1	0	0	0	0	4	1	0	0	11
4	0	1	2	1	1	4	0	0	2	10
5	2	0	3	0	0	0	0	0	0	14
6	3	0	0	3	1	1	0	0	1	10

「ポット」系がやはり安定しているが、松岩地区と比較して「ポッポラ」の場面6においての使用がないという点が注目される。場面6では「ポット」「ビラット」の促音を含む形が用いられているが、「新聞紙が現れる」という動きの突然さに、促音を含んだオノマトペを様態副詞的に用いた可能性がある。「グイラ」はやはり場面3・4で主に用いられている。

インフォーマント数は少ないが、6場面すべてで「どれも使わない」と回答したインフォーマントが松岩地区では中年層にも及んでいるのに対して、気仙沼地区では若年・少年層に限られている。気仙沼地区のインフォーマント数が少ないので断定はできないが、市街地である気仙沼地区よりも市街中心部から少し離れた松岩地区の方が、個人差のばらつきが若干大きいように思われる。

4.3 個人差の現れ方

以上から、松岩地区と気仙沼地区における個人差の現れ方を見ていきたい。3節で見たように、グイラ・ボット系オノマトペの個人差には、ある程度オノマトペの描写的意味を使いながら場面ごとに使い分けを行うタイプA、1つもしくは複数の特定の語を「急に」という意味で汎用的に用いるタイプB、そして使用頻度の少ないタイプCの3タイプがある。松岩地区と気仙沼地区における各使用特徴を有するインフォーマントの人数を表にまとめると、次の表8のようになる。A、B、Cは使用の各タイプ、「無」は6場面とも「どれも使わない」と答えた人数である。

〈表8〉

松岩	高年層	中年層	若年層	気仙沼	高年層	中年層	若年層	少年層
A	6	2	0	A	1	2	1	1
B	2	1	1	B	0	0	1	1
C	2	5	1	C	2	0	1	3
無	0	3	3	無	0	0	2	7

表8のように、松岩地区の方が使用頻度もばらつきが大きい。推測でしかないが、市街地の気仙沼地区では、語がどのような意味で用いられるかよりも、どのような場面で用いられるかが重要であり、慣習的な文脈の果たす役割が大きくなっているのではないだろうか。そのため、場面1や2のような「聞いたことがある」という文脈において、特定の語の使用が多くなる。

対して、松岩地区ではオノマトペが「急に」という意味を持ちうるということが認識されることで、様々な文脈に応用できるようになっている。そのことは、1つもしくは複数の語をすべて同じ意味で用い、「急に」を表すオノマトペの語群を好んで使うタイプBのインフォーマントがいる一方で、「急に」という概念的意味をとりたてて用いない、オノマトペの派生的な意味での使用に消極的なタイプCのインフォーマントも多いということにつながるだろう。

さらに、3節の世代差との関連で見ると、気仙沼地区のほうの若年層、少年層にタイプAの具体的描写性を残した使用をするインフォーマントが各1名いるものの、この話者はいずれも都市部からは若干離れた位置に居住しており、全体的にはグイラ・ボット系オノマトペの使用が消滅しつつある状況であると言える。一方、松岩地区では高年層にタイプAの話者が多いものの、中年層、若年層と下るに従ってタイプC→使用なしと推移しているように見える。そのため、時間の経過とともに気仙沼地区と同様の状況となることが予想される。

5 まとめと今後の課題

本報告では、オノマトペの中でも「急に」という意味に特化した語群、グイラ・ボット系オノマトペについて、気仙沼市における個人差と世代差、地域差を中心として考察を行ってきた。個人差に具体的描写性を生かしたタイプA、「急に」という意味に特化して使用するタイプB、ほとんど使

用が見られないタイプCがあり、世代が下るにつれたA→B→Cと推移するであろうことを予測した。しかし、タイプBの話者が若干少なく、また話者の人数自体が少ない周辺部に多く見られるらしいことから、世代と個人差のタイプの関連性を立証するにはこころもとない感が否めない。よって、今後は気仙沼のみならず他地域において多人数調査を行い、世代差と個人差のタイプの関係について検証を行っていきたいと思う。

注

- 1 オノマトペ以外の語彙または語をそれぞれ「一般語彙」「一般語」と呼ぶこととする。
- 2 語中の「イ」は「エ」になることが多く、具体的な語形としてインフォーマントに提示するアンケート調査票などには「イ」と「エ」を別に記載していることがあるが、基本的には「イ」のほうに「エ」を持つ形も含めることとする。31語は「イ」のもののみを数えた数字である。

文 献

- 小野正弘編（2007）『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』小学館
- 小林隆（2010）「オノマトペの地域差と歴史 —「大声で泣く様子」について—」『方言の発見』ひつじ書房
- 佐藤一男（2003）「十八、方言の擬態語・擬声語がおもしろい」『栗原郷土研究』34
- 菅原孝雄（1992）『気仙沼方言ア・ラ・カルト』三陸新報社
- 仁田義雄（2002）『新日本語文法選書3 副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 飛田良文・浅田秀子編（2002）『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版
- 山形県方言研究会編（1970）『山形県方言辞典』山形県方言辞典刊行会
- 川越めぐみ（2011）「山形県・宮城県におけるグイラ・ボット系オノマトペについて —具体的描写性の強弱の観点から—」『日本方言研究会第92回発表大会発表原稿集』